

# 三重県鈴鹿市白子方言の比喩語について

佐藤 虎男

はじめに

1. 調査対象地：鈴鹿市は、津市と四日市市との中間に位し、東は伊勢湾岸から西は鈴鹿山麓まで広がる田園都市である。一口に鈴鹿市方言ということには無理があるので、白子に限る。当地は海沿いを南北に展開する町で、旧河芸(かび)郡 白子(しろこ)町の三大字の一つ(中)である。近畿日本鉄道によって、名古屋方面や大阪方面への交通が早くから開けた。交易範囲は北は四日市、南は津が主。主な生業は商・農・工・漁業であるが、会社員家庭が多くなっている。
2. 調査年月日時：1993年1月4日午後1時30分～4時10分
3. 話者：堀部定子 大正15年5月21日生(66歳)  
片野あや子 大正15年12月8日生(66歳)
4. 調査者・調査場所：佐藤 虎男、話者堀部氏宅
5. 調査方法・調査の様子：調査票に基づいて尋ねる方法。所定の質問文での回答以外に、用意されてある予想形を提示してその使用を確認した。話者は二人とも筆者の小学校時代の同級生である。二人の回答は均等に受け止めた。ほとんどの項目で回答は一致したが、回答事象の違う場合、あるいは語彙分野に得意不得意があるせいで、一方が知っていて他方が知らないという場合もいくらかはあった。家々の群れ方はまさに一まとまりの町でありながら、単一生業の小集落などとは違うこの町には、特に今日のような時代では、こういうことも異とするに足らない。
6. 凡例：(1)共時論的に見て比喩語とは認められない項目については記載を略す。  
(2)使用者層その他の注記は、特記すべきものみに止める。  
(3)アクセントは、高音部位を「 〱 」で示す。
7. 【補】 調査票の項目以外の比喩語を、各分野別ごとに、紙面の許す限り【補】として添える。頭に●印をつけて区別する。なお、これは今回の調査によるものでなく、筆者の従前の調査資料(旧白子の方言として採録した)のなかから抄録するものである。

## 1. 《自然現象》

1. 日照り雨 ○キツネノ「ヨメリ(狐の嫁入り)日が照っているのに降ってくる雨。  
<名>全、ただし中以上に多い。稀。古。狐につままれたような雨だからか。
2. 入道雲 ○「ニュードー」グモ 夏の空高く盛り上がる雲。<名>。全。盛。  
その雲の形状が僧(入道)の頭を連想させるからであろう。

3. 旋風 ○「タツマキ・タ「ツ」マキ（龍巻） <名>。稀。

この現象自体がほとんどないので、馴染みの薄い語である。タツマキは大規模の旋風に使う語ではあるが、庭先に舞う小さな旋風にも使わないことはない。

○「ウス「マキ（渦巻き） <名>。稀。

枯れ葉が渦を巻くからこう言う。ただしこれは海の潮にできる渦巻きをも指す。

○「ツムジ「カゼ（旋風） <名>。主に中年以下か。新。誘導で答えられた共通語形。頭のツムジの巻いているのに譬えたもの。

4. 霜柱 ○「シモバ「シラ（霜柱） <名>。全、主に中以上。稀。

霜が柱状になっている形状を譬えた。ただ、最近霜柱の立つほど寒い日そのものが少なくなった。

【補】豪雨 ●「シャダレ<名>。稀。老。どういう比喩かを言うことができないが、比喩の可能性は大きいと考えてここに登録する。「エ「ライ ニ「ウ「カニ  
「シャダレガ シテキテ「エ「ライメニ オータ ワ。\*「シャダレスルも。  
地が食う ●ジー「ガ「クウ（地が食う）肥料は最初は土地が食って、作物はすぐには食わない。ここに擬人法が認められる。<動>。老。稀。古。

## II. 〈動物〉

9. かわはぎ ○「カワハギ（皮剥ぎ） <名>。皮を剥いで調理するところからの比喩である。なお、この名を知る人と知らない人とがある。

11. ひきがえる ○ヒキ「ガ「エル <名>。全。これは食用になる。

○ウシ「ガ「エル <名>。老。稀。古。ヒキガエルより一層大きい蛙で、これは食べられない。鳴き声が牛のようなので、こう言うのだと思う。

12. 青大将 ○「サトマ「ーリ（里回り） <名>。老。稀。古。一軒一軒家の中に回って来て鼠を取る大型で茶色の蛇。気持ちは悪いが、人間に危害を与えずおとなしい蛇なので、むしろ縁起がよいとされる。家々を回るのでこの名がついた。

○ネズミ「ト「リ（鼠取り） <名>。老。稀。古。青大将のこと。鼠を取るからこう言う。蛇の一般称は クチ「ナ「ワ（古）か ヘ「ビ（新）。

なお、ヘビのアクセントで、ビが拍内下降になる場合が老年層にままだ。

14. かまきり ○カマ「キ「リ（鎌切り） <名>。その形状が鎌で切る動作に似る。

15. みずすまし ○「ミズス「マシ（水澄まし） <名>。これは都会から来た賢いことば（筆者注、上品な教養語の意）だ。水を澄ますように軽く泳ぐからこう言う。

○「マイマイコ「ンボ <名>。これが昔からの言い方。老。稀。古。

マイマイは「舞い舞い」か「回り回り」か、よく分からない。

【補】桜貝 ●サク「ラ「ガイ<名>。その色に着目した比喩語に違いない。

## III. 〈植物〉

22. そら豆 ○オタフ「ク「マメ・オ「タ「フク（お多福豆） <名>。そら豆の大粒

のもの。中以上稀。 形状が「お多福」に似ている。

23. 木くらげ ○サルノコシカケ (猿の腰掛け) <名>。この物自体があまり見かけない物なので、「木くらげ」に当たるかどうか、存疑。サルノコシカケは食用にはならない。「キクラゲ」は食べられる。

【補】なずな ●スズメノキンチャク (雀の巾着) <名>。いわゆる七草粥は、この雀の巾着と普通の菜っばとを入れた粥のことである。

海草 ●ウミホズキ (海ほうずき) <名>。単に「ホズキ」とも言う。

柘 (ひいらぎ) ●オキノメツキ (鬼の目突き) <名>。節分の豆撒きに、鰯の頭を豆の木に刺して、柘と一緒に門口に刺して置く。

#### IV. (性向)

35. 嘘つき ○センミツツ <名>。(千三つ)老。稀。古。下品。千に三つの本当しかないの意である。

36. ほらふき ○オーボラフキ (大法螺吹き) <名>。中以上。下品。法螺を吹く者を強調した。単にホラフキとも言う。

○フロシキ <名>。中以上。下品。ほらをふくことを「風呂敷を広げる」という比喩から派生した。

○イックンプロシキ <名>。中以上。ごく稀。下品。一反もある風呂敷ということで、上記の語を一段と強調した。

37. おしゃべり ○クチガヨーマール (口がよく回る) よくしゃべる人の形容である。やや下品。人の性向を即物的に表現した点に比喩性がある。なお、これと反対のめったに他人の内緒事を口にしない人を「クチガカタイ」という。

43. 気むらな人 ○オテンキヤ (お天気屋) <名>。変わりやすいことが似ている。

○テリフリ (照り降り) <名>。老。ごく稀。古。上と同じ発想であるが、これの程度の甚だしい人をテリフリノヘンコツ (照り降りの偏屈) と言い、これは、テリフリニシンニュウカケタヨーナヒトのこと。  
老。稀。古。

44. 泣き虫 ○ナキミソ (泣き虫) <名>。稀。ミソは「虫」の転であろうか。人間を「虫」に譬えたところに批判と嘆きが伺われる。

45. おてんば ○オトコオンナ (男女) 男のような女。 <名>。中以上。稀。古。

○オテンバ とも。(お転婆) <名>。全。盛。新。

47. 出しゃばり ○デベツ (出臍) <名>。老。稀。古。下品。性向上の特徴を人体の特徴で譬えた。奇抜ともいえる喩材を身近なところに求めるその取り方に方言人の心が生きていよう。

○サイコヤキ いらぬ世話をやく人のこと。 <名>。老。稀。古。

10. 内弁慶 ○ウチベケンケ (内弁慶) <名>。全。盛。家の中だけ強い弁慶とい

う風刺の効いた比喩語。

【補】つまらぬ人間 ●「ラチアカ」ズ（埒開かず）＜名＞。中以上。盛。古。  
よく辛抱する人のこと ●コラエジョー「ガ」エー（堪え性がよい）＜名＞。  
稀。老。古。

苦勞を積んだ人のこと ●「セ」ケンガ「ヒ」ロイ＜形＞。老。古。

楽天家 ●ク「ナ」シ（苦無し）世間知らずの楽天家。＜名＞。老。稀。古。

夜遅くまで起きていて眠たがらない子のこと ●メガ「カ」タイ（目が堅い）。  
＜名＞。老。稀。古。なお、同じことを「ナ」ガイコト メ「ガ」アルとも。

## V. 《食生活》

56. 大食漢 ○「オーメシグラ」イ（大の飯食らい）＜名＞。下品。オーグ「ラ」イとも言い、これは中年以上でやや古風。下品。○クイ「シ」ンボ（食いしんぼう）＜名＞。これで大食漢を意味すること多し。ところで、この二つはあえて比喩語として取り立てるまでもないものであるが、これの反対の「小食」を表すのに、○「ショクガホ」ソイ（食が細い）＜形＞。老。稀。古。上品。がある。

58. 砂糖味が薄い ○「サトヤノカ」イドーハ「シット」ル（砂糖屋の街道を走っている）＜動＞。老。稀。古。元は「カド」（門口）であったろうが、ここではカイドー（街道）になっている。長崎地方を中心とする九州域にこの種の言い方の盛んな様は、愛宕八郎康隆「肥前長崎地方の「砂糖味がうすい」の表現法について」（長崎大学教育学部人文科学研究報告第31号、昭和57年3月）に詳しいが、それが中国筋にも辿られるばかりでなく、三重県下にも稀な事象として存することは注目に値する。

60. 大酒飲み ○「ソコガ」ナイ（底が無い）＜形＞。大酒飲みのきりもない点を、底のない桶か箱に見立てた。人を表す場合はこの語に「シト」を付けるか、またはソコ「ナ」シ という。

61. 酒に酔ってくだをまく ○クダ「マク（管巻く）＜動＞。日本国語大辞典によれば「くだくだしい」の「くだ」から「管」を連想し、それを「巻く」と言いなしたもののようである。とすれば、その「管を巻く」と言ったところに比喩が認められるであろう。が、土地人にはそのような認識があるわけではない。なお、そのように「くだをまく」人のことはクダ「マ」キ という。稀。老。やや下。

【補】薩摩芋の種類 ●「クリイモ（栗芋）くりくりとして栗のような芋。全。盛。  
●「ピンツケ（鬚着け）ねっとりとして甘味の強い芋。切り干しに適する。稀。  
雑魚 ●「チリメンジャ」コ（縮緬じゃこ）縮緬のように小さなもの。＜名＞。

## VI. 《動作・様態》

65. ずぶ濡れ・びしょ濡れになる、そのさま ○ドブ「ネ」ズミミタイナル（どぶ鼠のようになる）＜連語＞。稀。下品。一目瞭然の比喩。普通は ビショヌ「レ」。

68. 厚化粧をしている人 ○「カベヌル（壁を塗る）＜動＞。老。稀。下品。家に白い壁を塗るのに似ている点を捉えた比喩。カベヌリという名詞形はない。
71. 汗がひたいから流れ落ちるさま ○「タキノヨ」ーニア「セ」ガデル（滝のように汗が出る）＜連語＞。中以上。誇張をねらった比喩表現。
72. 目を丸くする ○マメ「デッ」ポークッタ「ミ」タイナ（豆鉄砲くらったような）＜連語＞。中以上。やや稀。調査のねらいは動詞形にあるが、動詞形の適語が見出せない。「～ミタイナ顔する」と言えば、動詞相当形になる。元々「鳩が～」であったろうが、その「鳩」の部分を書かないでも通じる。
- メー「ムク（目を剥く）予想外のことに驚く。＜動＞。盛。やや下品。
- 「シ」タマク（舌を巻く）畏敬驚嘆する。＜動＞。青以上。
- 【補】続けて芸者を買うこと ●「イツズケ」ウ「ツ（居続け打つ）＜動＞。古老。極稀（ほとんど死語に近いか）。古。
- 財産を注ぎ込む ●シン「ショフ」ルウ（身上振るう）＜動＞。古老。稀。下品
- 食えなくなって自殺する ●「ア」ゴツル（首吊る）＜動＞。古老。稀。下品。
- 世話を焼かず ●コマニ「マース（独楽に回す）関係者をくるくる舞いさせる。＜動＞。古老。稀。コマニ「マーシ」ヨルワ。あんたは。（老女→孫）挫折する ●「ポーオラ」カス（辛抱できなくて途中で投げ出す）老。稀。古。
- 損をする ●ア「ホ」ミル／「バ」カミル（阿呆みる／馬鹿みる）老。稀。下品
- 忌憚なく話す ●「ハ」ラワル（腹を割る）ほとんど全。盛。
- おべっかを使う ●「ゴマ」ス「ル（胡麻をする）＜動＞。全。盛。新。
- あわてふためく ●「トチメン」ボ「ヨコニフル（折麴棒を横に振る）＜動＞。古老。ごく稀（最早死語に近いか）。オ「ト」ーサンツタラ「トチメン」ボ「ヨコニフツテ」モツ「テツ」タヤガ。（老女→息子）古風。
- だだこねて大騒ぎする ●ヤ「カ」ラキル（「オーヤ」カラキルとも）＜動＞。主に子供などの騒ぎについて言う。ヤカラの語源未詳。筆者は長い間この語を知らずにいた。ことほどさようにごく稀。同じことを ●ランバチ「ヤルとも、また単に ●ラン「ヤルとも。後2者は老。やや稀。古。
- 八つ当たりする ●「アタンスル（仇する）立腹してやりばのない不満をあたりの人や物に対してぶつける。＜動＞。中以上。古。
- 好き勝手なことを言う ●タ「ヘ」ラクユー（太平楽言う）わがまま一杯に振舞う譬え。＜動＞。老。稀。古。
- 腹が立つ ●「ゴ」ガワク（業が沸く）老。稀。古。酷く言えば「クソゴ」ノワク。」となる。「業」（宿業）が「沸く」としたところに比喩がある。
- 何も手出しできずただ見るだけ ●「ユ」ビクワエテ「ミト」ル。どこにでもある比喩語。盛。

- 「そしらぬふり」・ド「コ」フク「カゼ」ヤ（何処吹く風か）＜文＞。中以上。古。  
 「ン」ナン ド「コ」フク「カゼ」ヤ チュ「カオシテゴ」ザル ゴ。  
 老衰でぼけること ●「グニカエル（愚に返る）歳寄って万事だらしくなり、  
 幼児のようになること。＜動＞。老。稀。古。  
 自分の従兄弟の子と自分との関係 ●「ハスカイイ」トコ（このハスカイは斜め  
 のこと）一世代ずれた関係をこう言うところに比喩があろう。＜名＞。稀。  
 ごく親しい間柄 ●ワレ「カオレカノアイダ（我か俺かの間）＜名＞。老。稀。古

〔小考二三〕

一、調査票による回答事象（【補】を含まない）のうち、比喩語と認められるのは、77項目中の34%にすぎない。これが、当地の、現在の比喩語の現実である。全国的にみてこれがどういう位置を占めるか、その正確な評定は今回の全国調査成果を待つこととした。が、第一の可能性として考えられるのは、他の分野の比喩語もまたこれと相対的に似たような比率になるだろうということである。つまりこれだけを調べれば、その地域の比喩語の方言量の多少は、ほぼその大要を把握しうる可能性である。ただこれは、今回全国規模を念頭に考案された調査票によって見た限りであって、地域によっては、あるいはここにとりあげられた項目以外では、案外方言量が逆に多いものがあるかもしれない。これが第二の可能性である。上に【補】として挙げたものばかりでなく今回の調査票にない他の語彙分野についてそのあらしを見るのに、量の多少はともかく、質的には結構見応えのあるものが多い。例えば人体語彙、生業語彙（一例、染色のとき色がにじむことを「色が泣く」という）、冠婚葬祭語彙（一例、「死んで茶の子の餅になるまで面倒みる」）、衣・住語彙などの他、一般生活語彙の中の特に副詞語彙（一例、「おいそれと」）などには見るべきものが多いように思うのである。

二、方言表現における比喩発想の自在さ奇抜さ、またその直接性、誇張性、あるいは身近な事物を喩材にとる取り方などは、すでに多く指摘されているとおりである。このことは裏を返して言うと、ありきたりの表現への飽きっぽさと新化への希求の強さが背後にあるということでもある。その生成隆替の盛んな様が、いかにも方言表現らしい。とりわけ、既存の比喩語に依存した比喩語の創作は注目すべきであろう。「大黒柱」があれば、これに依存して次に大事な柱を「テーシュバシラ」と呼ぶ式のもの、あるいは「フロシキ」に「イッタン（一反）」を冠したり、「テリフリ」に「シンニューカクタ」りして誇張する手のものである。

三、比喩語は必ず複合語である。単純語では比喩語にならない。「手」が比喩語となるためには、「熊手」「手下」などのように前後になんらかの語句を要する。それは、比喩がもともと文脈において存立するものであることの反映である。この意味において、「比喩語」は「比喩文」の凝縮であり、結晶であるといえる。（さとうとらお 皇学館大学）